
第2回自治体 EXPO フォーラム

～大阪・関西万博に向けて

開催報告

一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構 事務局作成

第2回自治体 EXPO フォーラム ～大阪・関西万博に向けて 開催報告

『第2回自治体 EXPO フォーラム～大阪・関西万博に向けて』を、2022年5月18日(水)に夢洲機構会員の両備グループが保有する御座船安宅丸船(神戸港より出航)にて、一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構主催で開催いたしました。経済界、各種団体、自治体等から沢山の方々にご参加いただき、盛大に開催できましたことを厚く御礼申し上げます。



開会の辞

野田 義和氏 東大阪市長



第2回自治体 EXPO フォーラムを開催いただきありがとうございます。第1回目は東大阪市の花園ラグビー場で開催いたしました。「スポーツ・健康・いのち」のイメージからラグビー場で開催いたしましたが、本日は海の万博に相応しい会場で開催できることを嬉しく思います。

私共自治体は 2025 年の大阪・関西万博に対し、様々な想いを抱いています。万博は半年間のイベントではありません。夢洲というところに USJ が設置されるということではないのです。必ずこの

大阪・関西万博を未来につなげていく。未来につなげるための二つのキーワードがあります。一つはイノベーションです。大阪・関西万博を契機に新しい価値を創造するという考え方で臨んでいきたいと思っています。もう一つは、「いのち輝く未来社会のデザイン」のテーマを受け止めるウェルビーイングです。全国の自治体それぞれが、このまちに住めばこういう幸せを感じることができる。そういったことを感じられる大きなチャンスとしたいと思っています。これは自治体だけでなく、多くの民間の皆様、大学を含めた全ての関係者による共創でできるものだと思います。我々も一メンバーとして共に頑張っていきたいと思っています。この素晴らしいフォーラムを開催いただきました夢洲新産業・都市創造機構の皆様、御協力をいただきました関係者の皆様、多くの皆様に心より御礼申し上げます。石黒先生の素晴らしいご講演も楽しみにしております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

第1部 講演・プレゼンテーション

◆講演

演題：「大阪関西万博と未来社会」

石黒 浩氏 大阪大学大学院基礎工学研究科荣誉教授 ATR 石黒浩特別研究所所長(客員)

(公社) 2025年日本国際博覧会協会 テーマ事業プロデューサー

今日はお招きいただきありがとうございます。大阪・関西万博の成功には地元の皆様の協力なしではあり得ないと思っております。あと3年弱ですが、色々な形、地元の皆様とイベントを行い、つながりを構築し、一緒に盛り上げていきたいと思っています。大阪・関西万博はきっかけに過ぎないと思います。この大阪・関西万博で皆がどのような体験をし、考え、そして新たな未来が拓けていくのだろうと思っております。それでは、未来に対するビジョンをお話させていただきます。



これから、少子高齢化でどんどん人口が減ってきます。それでも豊かなホスピタリティあふれる社会をつくっていききたい、日本のソリューションとしてテクノロジーを使っていたかということ。そういった社会の実現のため、私は多くのAI技術をあわせた人間に親和的なロボットをつくる研究開発を、世界に先駆けて取組んできました。

コロナになり、更にテクノロジーの必要性が高まってきたと思います。非接触で感染症の心配もなく、サービスを提供できるシステムをつくっていく必要があると思います。私はこのようなアバター(遠隔操作、コンピューターグラフィックスのエージェント)と、完全に自立で動くロボットの研究に携わってきました。人間のように自分で考え、会話ができるロボットを実現しようと開発をしてきました。不格好なロボットから少し可愛い人間型のロボットまでつくってきましたが、直近の「エリカ」さんは世界で最も人間に近いアンドロイドです。また、同時に遠隔操作ロボットもつくってきました。人とどう関わらせば人に近くなるのか、そういった問題を解くために誰かがロボットの中に入り、ロボットを動かし、実際に人と関わってみる必要があるわけです。最初は自律的に動くロボットをつくるためにアバター研究をしていたのですが、アバターそのものも使い易く、アバターだけで便利なのが沢山あります。最近自分のアバターが勝手に講演に行き、とても便利です。

皆様の中に、ダボス会議に参加されている方はおられるでしょうか。ダボス会議では最新型のびっくりするようなアバターが、映像だけですが登場します。どういう想いかと言いますと、人間の手足は「モノを使うため」に進化してきましたが、道具が進化してくると「表現をする」ために使うようになってきました。ところが、道具の進化の方が遥かに早く、人間の進化が追いついていないため、どう身振り手振りで表現すればよいか十分に人間がトレーニングされていない。本当に豊かに表現するには、多くのトレーニングをしないとイケなくて、正直アンドロイドの方が上手です。まさにそのようなアバターがダボス会議に登場しているので、もし機会があれば見ていただければと思います。私のホームページにも、私のアンドロイドが非常に豊かに振舞うような映像がもうすぐ見られるのではないかと思います。いずれにせよ遠隔操作型ロボットは相当便利です。そういう遠隔操作型ロボットの技術を使用し、新しい社会を創ろうとしているのが、この内閣府が進めているMOONSHOTになります。内閣府が2050年までにこういう社会・技術を実現させなければいけないという七つの目標を掲げていますが、一つめはアバター共生社会です。アバターを利用し、人々がもっと自由に働けるようにしようというものです。人が身体、空間の時間の制約から解放された社会を実現する、アバターとは何かに乗り移って働く、ロボットに乗

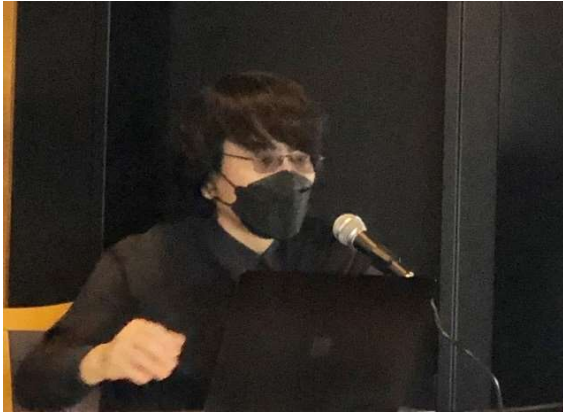
り移って働くわけですから、体が悪い人でも自由に働けるようになるわけです。わざわざ出掛けなくてもアバターだけ送っておけばすぐにそこで働けるため、好きな時にどこからでも働くことができます。最も私が期待しているのは、例えば深夜ビルの警備は大変ですが、アメリカやブラジルでの作業を、遠隔操作で日本の昼間に働くことができます。時差を利用して自由に働くことができるので、こういうことができるようになれば、人口が少なくなり労働者不足という問題も解決できるようになるのではないかと考えています。

他にも大事な目標があります。例えば量子コンピューターや完全自立型の AI など色々とありますが、まずこのアバターの共生社会をつくろうということが目標に掲げられています。私はそのプロジェクトマネージャーをしており、日本の主な大学の先生方が 40 名ほどおられます。私の分野では日本で一番大きな研究プロジェクトをさせていただいております。

どういう社会をつくりたいかといえば、高齢者・障がい者を含む誰もが色々なアバターを用いて、身体的・認知・知覚能力を拡張しながら、常人を超えた能力で自分の能力以上に働く。例えば高齢者の方がアバターを使えば、もちろん自分より高い身体能力で働くことができます。色々な情報なども、調べたりしながら働けるため、より高い知能レベルで様々な活動に参加できるようにすることができます。いつでもどこでも仕事や学習ができ、通勤通学時間を減らし、自由な時間が十分とれるような社会を実現できればと考えています。

例えばどういう学習環境・教育環境がよいかというと、やはり個人指導です。アバターがあれば家でアバターの家庭教師をつけ、子どもに応じた教育ができます。学校が不要ということではありません。学校には友達をつくるという重要な役割があります。そこでもアバターを活用すれば世界中の子どもたちが集まり議論ができます。仕事も同じです。できることはどんどん家でやりましょう。例えば経理とか法律の専門家が必要であればアバターに入ってもらえばよいわけです。一方、プロジェクトなど議論をする際には皆で集まればよく、そこでもアバターを利用して世界中とつながることができます。病院はもっと重要です。感染症にかかり病院に行くと、そこには多くの感染症の人がいるので心配になりますが、お医者さんがアバターで往診にすればこの問題は解決します。また、まちの病院は、専門性が一つであることが多いのですが、アバターで様々な専門医が加われば全ての病院が総合病院になる、そういう未来がつくれるのではないかと考えています。既に大阪市内の色々な施設と連携をして色々なアバターの使い方を検討しています。去年から保育園に高齢者の方が入ったアバターを設置して話をさせていただいています。コロナで高齢者施設も保育園も外部の人が入れなくなっていますが、アバターであれば全く問題ありません。大学の保育園では、高齢者の人が毎日可愛いロボットに入り、子どもたちとお話をしています。高齢者にも子どもにも非常に喜ばれています。子どもはどのような話が聞けるのかを楽しみにワクワクしていますし、高齢者は子どもたちと話ができて、とても元気になっています。こういうことを定着させ、皆様の自治体でも行わせていただける機会を得られればと思います。

スーパーでチラシを配っているアバターもあります。コロナで商品説明活動ができなくなっていますが、アバターであれば問題なくできます。コロナで今まで人がしていたことができなくなりましたが、一旦コロナで止めたことは復活しにくいのではないかと考えています。今でもマスクをしていますし、なんとなく完全にコロナ前には戻れないパターンだと思います。やはり人と人は話をして関わることで元気が出て、生きる大きな目的にもなるのだと思います。生活が豊かになり、モノや食べ物にも困らなくなり、では何がしたいのかということと人と人がもっと深くつながり、自分たちの可能性について色々話をし、未来に向かって様々な夢を描いていく。人と人とのつなが



りの重要性はより高くなってきているのに、コロナがブレーキをかけている感じです。それを絶対に解決していく必要があり、アバターは我々にとって大事な問題を解決してくれる可能性があります。

海遊館が経営しているニフレルという水族館と一緒に動物園が、吹田の EXPO シティ内にあります。です。そこに可愛いロボットのアバターを 8 台程入っていますが、常に全てのアバターが忙しくなるわけではないので、操作をする人を 4 人程

置いています。少ない人数で色々な場所でサービスの提供ができるというメリットがあります。人間より効率よくサービスの提供ができます。通常、飼育係の人は子どもと話できませんが、アバターを使えば話をするので、とても喜んでいただいています。

アバターで仕事をするというのは自分の新たな可能性を見つけることでもあり、新たな働き方もできるのではないのでしょうか。

アメリカなどでは GAFA が直接資金を出し、大学の人を雇い、AI 技術やロボット技術に関する社会実験をする動きが見られますが、日本では見られません。そのため、私は「AVITA」という会社を設立し、「Virtualize the Real World」というスローガンを掲げています。私達は実世界で生身の体で働いているので、この生身の身体で失敗をするとほぼ取り返しがつきません。しかしバーチャルでは色々な世界があり、匿名でもあったりするので、少し失敗してもまた別のところにいけばいいわけです。もっと自由に働き、活動ができます。残念なのは、バーチャルの世界ではきちんとお金が稼げる仕組みがないということです。ほとんどの経済活動は実世界で行われています。実世界でアアンドロイドやロボットや CG キャラクターなど、アバターで働けば、失敗しても別の CG のキャラクターになったり別のアバターに移れば、まるで仮想世界、バーチャルの世界で活動しているようなメリットが生まれます。自分の可能性をどんどん広げることができます。もちろん身体障がい者の方や、色々な問題を抱える方に提供すれば健常者の方と変わらず働けることになります。高齢者は色々な知識を持っていますので、足が悪い高齢者でも知識を活用し、子どもたちと話をするとか、色々な働き方ができるのではないかと思います。

既に私の会社では、様々な実証実験や実際のビジネスを行っています。大阪道頓堀・戎橋に期間限定で開設した店舗にて、美容・健康で人気のクラフトコーラ「UMAMI COLA」の接客販売をアバターが行ったのですが、アバターがいない期間と比較すると売上は 2.5 倍くらいになりました。最近最も成功したのは、JR 西日本の駅で行った野菜販売です。地方で生産された野菜などを、どのように料理に使用すれば美味しいのかといった話を生産者がアバターで話します。駅で地方の食材を販売するため、生産者に駅に来ていただくのは大変ですが、アバターであれば仕事の合間にできます。これは地方活性化に使えるのではないかと思います。

万博は最大の国際イベントです。コロナ禍後のイベントというのはアバターを利用し、バーチャルを使えば新しいイベントを開催できるということを大阪から発信していければと思います。

大阪・関西万博は、絶対にオリンピックのように入場制限をするという話にはいけないと思っています。コロナ禍後のイベントというのは、アバターやバーチャルの技術を使い、リアルとバーチャルをあわせて世界中の人をいかに招待すればイベントが開催できるのかを大阪から世界

に向けて発信できればと考えています。新しい国際会合や新しい国際イベントの在り方を見せていきたい。そこで沢山のアバターを使用して多くの人々に参加してもらえればと思います。私のパビリオンのイメージは未来のシーンです。50年後にどのような未来のシーンが展開されるのかということを、協賛企業の方々と一緒に議論をしながら進めています。一般的に企業は3年程の未来を考えていると思いますが、50年先の未来を考える機会を持てば、会社を担っていく人たちが色々なことを考え、長期的ビジョンで会社だけでなく社会の発展に寄与していただけるのではないかと議論を重ねて準備を進めています。

50年前の万博では発展する科学技術のまん中に、岡本太郎氏の太陽の塔がありました。太陽の塔は人間の命を象徴しているものだと思います。同様に人間が進化するとどのようになるのか、どう進化していくのか、千年、一万年、十万年先の人間の進化のかたちを芸術的に表現できればと思っています。私のパビリオンのテーマは「いのちを拓げる」ですが、科学技術で人間の技術がどう拓がっていくのかを見せ、特に若い人に希望を持っていただきたい。大阪・関西万博全体の中で様々なアバターを使い、新しい未来社会をそこから始めていきたいと思っています。この大阪・関西万博の後に人間とアバターが共生していく社会を世界に発信していければと思っています。是非一緒に取組み、協力いただければと思います。

◆プレゼンテーション

伏見 隆氏 枚方市長

枚方市は、本年市制施行 75 周年を迎え、人口 40 万人、面積は約 65km²、市の花は菊と桜、市の鳥はカワセミです。大阪と京都の中間に位置し、京阪電鉄が淀屋橋―京都間を繋ぎ、どちらへも約 30 分程度で移動できる便利なまちです。自然と都市部が共存しており、西に流れる淀川は万博会場へつながり、東には生駒山地があり京都・奈良と接しています。ここには多くの農地や里山があり、2009



年に日本の里山百選に選ばれ貴重な生態系がある地域です。枚方市には様々な歴史・文化があり、江戸時代には、淀川舟運、天満橋の八軒家浜と枚方船着場結ぶ定期便がありました。歌川広重の絵に東海道五十三次というのがありますが、実際の宿場は五十七次あり、枚方は五十六番目の宿場町として栄えました。大阪の国特別史跡は大阪城と百済寺の二つありますが、その百済寺は枚方市にあります。朝鮮半島にあった百済滅亡後、王族の末裔が 8 世紀に建てたものです。

昨年夏、まちの中心部に枚方総合文化芸術センターがオープンし、文化芸術の発信拠点として様々な取組みを行っております。現在、枚方市駅周辺の再整備で商業施設やホテルの開発工事が進み、2025 年の大阪・関西万博の前年に完成予定です。以上が枚方市の紹介となります。

我々は、2025 年大阪・関西万博に向け、新しい価値を見出し、民間業者と市民と共創する「ひらかた万博」を行います。枚方市の資源を活用して万博を盛り上げていきたいと思っています。それは、夢洲の会場だけでなく、枚方市でもひらかた万博を開催していく、枚方市の歴史・文化を掘り起こして楽しむ。そして多くの人に知っていただき、お超しいいただき、経済を活性化して最終的には市民の誇りにつながっていくことを目指していきたいと考えています。

本日のフォーラムのテーマが、一海からつながる共創機会に向けて―ということで、海と枚方市

を繋げる、淀川と我々の大事な資源の一つである淀川河川敷についてお話しします。

枚方市駅のすぐそばに淀川河川公園があります。先程、枚方は東海道五十六番目の宿場町と申しましたが、この東海道のすぐ目の前を淀川が流れています。かつての天満橋の八軒家浜から伏見までの舟運を、是非とも、大阪・関西万博を機会に伏見までつなげ、賑わいを引っ張っていきたい、その中間地点である枚方、江戸時代に栄えた中継港・枚方に多くの方にお越しいただければと思います。歌川広重の「京都名所之内淀川」に三十石船がありますが、この船が伏見と天満橋を行き来していました。三十石船の乗客に物を売る小さな舟が枚方の船宿から出ていたのですが、非常にガラが悪く、お客様に「もち食らわんかい」といった声をかけ、枚方に行けばガラの悪い物売りが現れるということで、当時「くらわんか舟」と呼ばれ、とても有名でした。十返舎一九の「東海道中膝栗毛」で、弥次さんと喜多さんがくらわんか舟について話をしている場面もあります。現在、国交省と大阪府で、大阪湾から淀川上流まで舟が運行できるよう閘門をつくる工事をしていただいております、2025年の大阪・関西万博前までに閘門が完成します。我々としては、舟運で夢洲の会場から枚方市が繋がるよう様々な関係機関にお願いしている状況です。

また、今年3月設立された、国土交通省による淀川舟運活性化協議会においては、舟運の活用が謳われています。淀川、淀川河川敷が活用されていない、もっと資源として活かしていこうということで、先日5月8日に淀川河川敷において実証実験を行いました。カヌーやSUPなどのプログラムを用意し、市民が楽しむだけでなくビジネスとしての活用を考え、参加費をいただく事業を実験してもらいました。他にも淀川沿いの街道、総合文化芸術センターのホールやひらかたパークなどでも実証実験を行いました。

また、夢の構想ですが、空飛ぶクルマを一つの交通機関として活用できないかと考えています。川の上を移動し、夢洲と枚方市までの30kmをつなげ、川の傍にあるヘリポートを活用できないかと思っています。

ひらかた万博では、淀川舟運、空飛ぶクルマ、枚方市の様々な資源(農地や里山)を活かした持続可能なライフスタイル、かつて栄えた宿場町、歴史・文化、食などをも新たに掘り起こして発信していきます。市内には企業団地が七つありますが、そこの皆様とも協力しながら、技術を持続可能な社会に活用していくことについて協議をしています。持続可能な社会の実現を考えると企業の皆様との連携が欠かせません。この大阪・関西万博を一過性のイベントで終わらせず、地域の資源を活用し、皆で楽しみ、新たな価値を創造し、万博の先の目標を目指し、取組んでいきます。我々はその取組みを「公民共創」と言っています。

皆様におかれましては、枚方市と共創できるものがあれば何でも結構ですので、是非ともご提案をいただきたい。皆様と共に「ひらかた万博」を創っていきたい、皆様と一緒に公民共創を進めたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

◆プレゼンテーション

南出 賢一氏 泉大津市長

泉大津市は市制施行80周年です。コロナ禍ですが様々な取組みを進めています。本市は毛布生産日本一、国産毛布の約90%が泉大津市で生産されておりシンボルマークは羊です。

本日は、アビリティタウン泉大津実証実験都市についてお話しさせていただきます。アビリティタウンというのは、アビリティー人間の本来の能力・技能、才能などを最大限引き出せる街をつくらうということで、色々な実証実験を重ねております。泉大津市は、鉄道で関西国際空港ま



で約 20 分、難波まで約 20 分、高速道路は東からの結節点で、主要なところへ 40 分から 1 時間あれば移動ができる、昔からの交通の要所です。また、国際港である堺泉北港を抱えており、「関西のへそ」と言わせていただいています。

「大津」という名前ですが、ここは都に食を献上する御食国といわれており、弥生時代の大環濠集落跡、池上曾根遺跡があります。また、和泉国の港の機関、津が置かれ、土佐日記では紀貫之も詠んでいます。このように「大津」は奈良時代から

しっかりと認知されていました。泉大津市の目指す姿については、泉大津市から日本、世界の共通課題の解決までを官民連携、市民連携でゼロから 1 をつくるということを戦略的に言っています。かなりエッジのきいたチャレンジを行っているのですが、最近ではコロナ後遺症、長期に渡るワクチンの副反応について、自らの治す力を高めて改善を目指す取組みを官民連携で行っています。

その中で、大阪・関西万博に向けて、自治体では、全国初で共創パートナーに登録させていただきました。万博に関係なく取組んできたことですが、大阪・関西万博が追い風になり、スムーズに登録ができたと思っています。

大事にしたいことは、「経世済民・四方よし」です。社会課題の解決で人を幸せにする、その結果経済が回る。四方よしというのは、「売り手よし、買い手よし、世間よし」だけではなく、私自身にも問いかけていることですが、「地球環境に恩返しできていますか」と問われると反省ばかりです。地球環境に恩返しが出来ている状況というのが、結果的に持続可能になっているのではないのでしょうか。また、「自分の身体は自分でケアをする、整える」など、できるだけ行政のフィールドを民間企業様に使いこなしていただくことをテーマにしています。更には「課題解決の選択肢を増やしたい」です。多様な時代ですので、西洋文明に東洋文明を融合させていくことにこれからのポイントがあると思います。

我々の認識ですが、前提として「現代人は退化をしている」と思っています。あまりにも便利になりすぎ、本来人間が持っている免疫も含め、退化をしている。その前提に立って物事を考えています。人間はやはり自然の一部でしかなく、この考えに立ち、本質的な視点とテクノロジーを融合させることを大事にしようと思っています。人間本来に備わっている力を最大限に引き出し、QOL とウェルビーイングの向上をしっかりと実現していきます。

例えば、特定健診だけで可視化をするのは難しいのですが、色々な技術を使って健康状態の可視化を行っていきます。抗酸化状態、自律神経の状態、血行血流の状態、栄養、ビタミン、更には免疫について可視化ができます。今までの取組みにより、可視化をすると西洋医学だけで解決できない部分も、おそらく上で述べた事例についてある程度善処できるのではないかと感じています。今年度は特に女性の更年期における健康課題について積極的に取組み、QOL がどうなるかの実証実験も市の事業として行っていこうと思っています。ご興味があれば是非お問い合わせください。とにかく医療以外の選択肢を増やすということです。治す力を高め、本来人間が備わっている力を高めることで、そもそも病気になりにくくなったりします。免疫が可視化できるというのは非常に面白いです。

大阪・関西万博に向けた様々な共創チャレンジの取組みの中から一つ取り上げますと、「生理用品をトイレットペーパーと同様の世の中にする」というプロジェクトがあります。市役所のトイレや駅前の商業施設内にある図書館など、アプリをかざすと無料で生理用品を取り出せる取組みを行っています。市内の小・中学校の女子トイレには、既にトイレットペーパーと同じように設置していますが、格差なども解消できればと思っています。

本日のプレゼンテーションの一番のポイントですが、泉大津堺泉北港(国際港湾)にある泉大津フェニックスは、約 200ha、甲子園球場約 50 個分の広さがあります。ここには多目的広場・緑地(約 20ha)があり、水上飛行場関係者やキャンプメーカー様が視察に来られたりします。また、野外ロックフェスの聖地として、有名なアーティストの方も来られます。開催日には1~2 万人が訪れます。この場所は音害がありません。便利な都市部で自由に音が出せるような場所はなかなか存在しませんが、この場所は夕日が沈む方向にあり、関空の飛行経路も見える最高のロケーションです。晴れた日には淡路島も望めますが、普段ほとんど使われていないので、どんどん実証実験をしていただきたいと思います。G20 サミット時はヘリコプターの基地に使用されましたが、夢洲まで 20 kmの地点なので、今後は「空飛ぶ車」など最大限活用していただければと思っています。この泉大津フェニックスにつながる河口の二級河川「大津川」は、普段は立ち入り禁止区域ですが、都市型レジャーができないかということで、海釣り大会の実証実験を行っています。ハマチなどが釣れるのですが、ここは貧酸素の場所でした。大阪の海、神戸港も以前はかなり水が濁っており、「G20 大阪サミット 2019」時にも海が汚すぎるという声があったと聞いていますが、この河口付近を生物多様な空間にできないかという共創チャレンジを行っています。昨年からの取組みの結果、波が穏やかな時は非常に透明度が上がりました。多くのイワシがいるところに大きなチヌが泳いでいます。エビやカニも多く見られます。海藻が増えているのではないかと想像していますが、微生物が元気になり、小魚が寄ってきて大きな魚が来る。そして鳥がくる。綺麗な水、生きた水には人が集まります。こういう取組みを小さいエリアから実現し、万博の会場にも広げられればと思います。

更には「水都大阪」です。大阪で水が非常に綺麗になると世界的なニュースになります。やればできるのだということを一つの自治体でも取組み、水都大阪を復活させようという強い機運をつくっていききたいという想いで取組んでいます。他にも 2023 年度には、海と内陸をつなぐ結節点にある場所に、森で囲まれた緑豊かなヘルシーパーク(約 4ha)がオープンします。できればテクノロジー+完全循環型のエリア、「微生物から元気」なエリアをつくりたいと思います。人間の健康を取り戻そうと思えば、正しい自然環境と表裏一体だと思っていますので、そういうことを思い出せる空間をつくっていききたいと思います。

泉大津市の港湾は大阪港湾局が管理者ですが、ヨットハーバー前のなぎさ公園は、雑草が生い茂る荒れた状態でした。泉大津市ではここをフィールドとして自由に使用する、グランピングやバーベキュー用地として商業利用を行い、その売上げで公園の維持管理・美化をするといった仕組みを進めたいと考え、大阪港湾局に働きかけ、昨年 6 月に、緊急事態宣言中でしたが施設をオープンしました。この取組みは非常にうまくいき、年末までに 8,000 人が訪れました。持っている資源、フィールドをできるだけ皆様に提供しながら、官民連携、市民共創で未来のあたりまえをつくる取組みを進めていききたいと思います。また、泉大津フェニックスの緑地空間(約 20ha)を、海の万博ということで活用し、泉州地域の自治体の皆様によるプレ万博や、泉州大阪・関西万博のようなものを 2025 年まで実施しながら前向きな機運をつくっていききたいと考えています。

◆プレゼンテーション

中井 章太氏 吉野町長

コロナ禍も3年目となりましたが、今年は多くの方に桜を見に来ていただきました。来年も是非吉野のさくら、下千本から上千本まで一斉に咲くさくらの姿を見ていただければと思います。

まず、私個人のことを話させていただきます。私は、恵みを与えてくれる山に感謝の意を込め、年末に吉野の木にお供えをしています。私自身、木や山が心の依りどころです。吉野町では木や山に



関わる人を山守といいます。私も町長という職業と山守をしています。山守は数世代をかけて山を守っていきますが、特に吉野町の場合は、人工林として500年の歴史がありますので、数世代後の山づくり、というものが引き継がれていると思っています。そして、皆様の元へ育てた木を渡していくのですが、吉野町にはその製材、木を貯める貯木所がございます。貯木所から都市部の方へ製材を運びます。海がテーマでなぜ山の話をするのかといいますと、「新鮮なお刺身にお醤油、日本酒に舌鼓み、世界に誇る和食」に、大和、大阪との海のつながりの重大なヒントが隠されています。和食にはお酒、醤油、味噌、酢などの発酵食品が欠かせませんが、この発酵食品をつくるのに欠かせないのが樽、吉野杉の樽で、ここに大阪湾の水運が大きく関わっています。吉野杉の大きな特徴として、年輪が非常に細かいという点がありますが、一つ目の特徴としては「やすらぎ」です。吉野杉にはアロマ、香り成分が多く含まれており、疲労回復、緊張緩和に効果的でラベンダーの香より早く眠れる成分です。二つ目が「てぎわり」です。年輪の間に小さな空気のクッションがあり、一年中さらっとした手触りで適度な温度を保ってくれます。三つ目は「強さ」です。皆様が一番身近に感じるのは割り箸だと思いますが、割り箸の先端が非常に細く折れない。これは年輪があるからです。年輪がなければ弱くなります。年輪が吉野杉の強度を保っているというのが大きな特徴です。そしてまた、抗菌、抗カビ成分が多く含まれているので、食品・食材でも使われています。このように吉野杉の特徴が発酵食品をつくる時に非常に重要でありました。

今から200年前、300年前の江戸時代の水運では、紀ノ川を使い吉野杉や吉野杉の樽を造る材木を大阪湾へ運びました。一斗、二斗、四斗と、様々な大きさに加工された樽は、灘の酒造りや酒を運ぶ容器として使われ、ピーク時は年間百樽もの酒樽が運ばれていました。

大阪からは、早くて4日、遅くて2週間以内に江戸に荷物が届けられるのですが、吉野杉の香りがするお酒は江戸で非常に人気がありました。お酒を消費すると空の樽が残ります。それが漬物、醤油、千葉の野田や銚子の醤油、愛知の八丁味噌などに再利用され、日本の発酵文化を支えてきました。吉野杉は吉野川水運、大阪湾の水運を使い関西に製品を納めておりましたが、吉野川を渡る鉄橋の終点駅、吉野駅の手前の吉野神宮駅にある貯木場で厳選されていました。かつてはこのように経済発展をしてきましたが、木の伝統が薄れるといいますか、木材価格が低迷していく状況で様々な変化を求められてきているというのも事実です。木のまち吉野町ですから、その文化を残していくと同時に未来につなげていくという役割が課せられています。

吉野町の真ん中には吉野川が流れ、上流では蛇行していますが、真っ直ぐになってきている所に貯木場があり、製材所が集積しています。こういう場所で木を運ばなくてはなりませんので、昔

は河川改修に多くの方に御尽力をいただきました。

今回は、吉野町の資源の中から「木」のつながりをメインにお話しをさせていただきます。吉野町は奈良県の真ん中に位置します。京都、新大阪から約2時間、関西空港から約1時間20分、和歌山まで約1時間30分という、立地的にまだまだ可能性があるのではないかと考えています。

吉野の木と各地とのつながりを少し挙げますと、桧のマスクや牡蠣養殖の筏があります。吉野の木は強度が非常に強いというお話しをさせていただきましたように、荒れる海では強度が大変必要となりますので吉野の木が筏で使用されています。他には酵素で自然発酵をさせて健康と美容に利用できる木くず、木漕タンクで木桶から発展した貯水槽などがあります。

吉野町には、隈研吾氏が吉野杉を用いて制作したトイレや、「吉野杉の家」があります。「吉野杉の家」は、世界とつながるという象徴ともいえますが、Airbnbと建築家の長谷川豪氏とコラボして建築したもので、お台場にある未来の住宅博でも1ヶ月展示されました。展示後は吉野川のほとりに移築していますが、Netflixの「いつか泊まりたい！世界で極める！魅惑のパケーションレンタル」で配信されました。宿泊者の6割、7割の方は外国の方々です。続いては、未来につなげる学校ということで、今年から小中一貫校として開校した「吉野さくら学園」です。吉野の木をふんだんに使用した校舎になっています。皆様は、木はとても高価だと思われるかもしれませんが、地元の製材組合から協力を得て素晴らしい校舎が出来上がりました。数年前から吉野町では木育事業の一環として、地域の製材所、木材関連業者様と先生方で、中学入学時に新入生が自分たちで机を組み立て3年間使うという取り組みを続けています。小学校一年生は自分で机をつくることはできませんが、机を9年間使用するという取り組みを進めています。

昨年4月、新たな森林環境管理を担う人材を育成しようということで、奈良県のフォレスターアカデミーが吉野町でスタートしました。一番大きな課題は、やはり山の仕事に従事する方をどのように育成するのか、ということです。フォレスターを主体に地域で育成していきます。特に2024年度から森林環境税が森林環境譲与税へ譲与されますので、教育と人勢育成の場をつなげ、活用していきたいと思います。

今年4月にテレワーク、コワーキングスペースが完成しました。地方創生テレワーク交付金を活用させていただき、ここを拠点に企業とマッチングをしていきたいと考えています。この場所は吉野川が見えますので、非常にリラックスした感じで仕事をしていただければと思います。木々の間に光が一瞬射しこむ美しい瞬間があり、その瞬間を切り取った写真は「美の壺」でも放映されました。日仏160周年記念で上映された、万博プロデューサー河瀬直美氏の映画「Vision」、仏題は「Voyage a Yoshino」吉野への旅ですが、こういうものもどんどん活用したいと思います。最後に、吉野川は大阪までつながっています。その風景からは是非癒しを感じていただきたい。吉野町で眠っている資源を皆様のお力をいただき、吉野の地で色々と興していきたい。辺境の地からの教育再生や風景を活かしたまちづくりを目指していきたいと考えておりますので、この機会を通して多くの方が吉野町にお越しいただけると嬉しいです。

◆プレゼンテーション

阪口 伸六氏 高石市長

高石市は大阪のへその上にあり、かつて歌川広重が描いた絵には白砂青松、紀貫之が謳った「音にきく 高師の浜の あだ波は かけじや袖の 濡れもこそすれ」が有名ですが、海水浴場には年間100万人もの人が訪れていました。それが堺泉北臨海コンビナートに代わりました。コンビナー

<モデレーター>

◆高橋 朋幸氏 (株)三菱総合研究所 参与 営業本部長 万博推進室長



高橋氏：まず石黒先生、各首長様のプレゼンテーション、船上 MICE の感想や、自治体との実験など、改めて感じられた可能性などについてお願い致します。

石黒氏：それぞれの地域には色々なユニークな資産がありますので、是非大阪・関西万博でも連携させていただければと思います。内閣府では大学でアバターの技術の実証実験を行っていますが、地方の様々な活動をアバターを用いて全国に広げる、大阪・関西万博で紹介する、そういう取組みを相談しながらできればと思いました。

アバターは色々な活動ができない方もできるようになるので、地方の元気で様々な知識をお持ち多くの高齢者の方たちが色々な知識を子どもたちに提供する、それぞれの町の色々な魅力、自然や歴史を子どもたちに伝えることなど、できることは沢山あると思います。



高橋氏：ありがとうございます。アバターで色々可能性が広がっていくと思います。では、伏見市長、枚方が東海道の五十六番目の宿場町ということで、思わず立ち寄りたくなる淀川の中継港という話でしたが、歴史的な背景、人やモノや技術など、これから期待されること、企業や大学などへの期待などについてお聞かせ下さい。



伏見氏：枚方市は江戸時代に栄えた交通の要所で、色々な人やモノが集ってきました。私は枚方市にとどまらず、多くの緑、里山を残していきたいと思っています。これをビジネスでできれば、それが持続可能となります。色々な観光事業に取り組む中で、古くから伝わる歴史や伝統を石黒先生がおっしゃられたメタバースなどの新しい技術を取り入れながら、古いモノを復活させるだけでなく未来に向けて構築できればと思います。メタバースやアバターなども取り入れ、新しいモノを民間の事業者や研究機関と連携し、創っていければと思います。

石黒氏：少し補足をしますと、少し前の未来のイメージ、「未来は全てガラスや石でつくられた…」という未来が来るとは思っていません。ゆとりが出てくると、文化を大事にしたいくなる、それをテクノロジーで支え、文化的に豊かになるというのが未来です。そうすると、歴史や地方で大事にされているものが表に出てきます。都会で洗練された無機質なものに疲れていくのではないかと感じています。地方で蓄えられている様々な文化が表に現れ、もっと大事になるのではないかと感じています。

高橋氏：ありがとうございます。では南出市長、アビリティタウンというお話がありましたが、これは人の可能性を拓ける、追及するということで、石黒先生のパビリオンのテーマにつながると思いました。何かお考えなどございましたらお願いいたします。

南出氏：石黒先生のお話を聞かせていただき、非常に親和性があると思ったのは図書館です。昨年9月に泉大津駅前の商業施設の中に約 3,000 m²の図書館をつくりました。泉大津駅は南海本線で5番目に乗降客の多い駅で、半年で20万人が図書館を訪れたのですが、うち市民は7万1千人でした。この図書館には、図書館の概念を変える、無料で完全に使える九つの商業マーケティングデータベースを用意しました。このデータベースをとにかく使い倒していただきます。ここではイベントも開催しており、現在のところ年間で300回ほど行っております。実はオープンと同時に猫型の話をするロボットを置きました。ロボットで図書の案内や検索をするといった実証実験を行っていますが、アバターを使用することについて親和性があると思います。このロボットを提供してくれた会社は泉大津市にあり、最近では日本で初めてロボカフェをオープンしています。このように泉大津市には素地があり、また寺社仏閣や、史跡公園もあるので、地域の課題解決に向け、地域と上手にコラボしながら、進めていくということです。まず実装段階で皆様に見えるような形で、まちの中で取組みが動いている、ということを行っていきたくと、とても強く思いました。



高橋氏：ありがとうございます。石黒先生何かコメントはありますかでしょうか。

石黒氏：こういった取組みがどんどん増えていけばいいと思いますが、やはり文化です。ロボットというと非常に未来的で無機質といったイメージがありますが、人と人をつなぎ、文化を大切にしていく。科学技術も大切ですが、科学技術で解けないのちや心は文化の中で醸成されていきます。文化を蔑ろにすると人間の価値が本当に低下してしまいますので、両方を上手く合わせた形で未来が創造できればよいと思います。

高橋氏：「多様な主体に使いこなせる空間づくり」という大きな泉大津フェニックスのお話がありました。今日は企業の皆様もおられますので、例えば大阪・関西万博との連携、文化と組み合わせた連携などについて期待されることがあれば、南出市長お願い致します。

南出氏：泉大津市はかつて和泉の国の港があった場所です。例えば、高石市は石油コンビナートがありますが、泉大津市の港は昔から物流の港湾機能を担っています。人、モノ、情報が行きかう場所です。この地政学の成り立ちを活かし、海の駅、空の駅の可能性があると思います。「いのち輝く」という点について言えば、微生物から元気になる、テクノロジーを使って何か未来のあたりまえをつくりたい。もう一つは都市型レジャー、アウトドア、野外空間を活用し、大阪の文化と融合できればいいなと思います。だんじり祭りも盛んな泉州地域は寺社仏閣も多く、和泉の国は歴史が豊富です。そういった資源に上手く触れた活用方法を皆様と一緒に生み出していただければ嬉しいです。

高橋氏：ありがとうございます。海や空の駅という話がございましたが、枚方市の空飛ぶ車の話と上手く連携できそうなことはありますか。

伏見氏：空飛ぶクルマはまだ話が進んでいる段階にはありませんが、企業様と連携しないと実現できません。大阪・関西万博と枚方市をつなげたい、更に枚方市を拠点として京都や大阪とつなげていきたい。川を使って移動できるのが大きなメリットですので、連携パートナーをこれから見つけていきたいと思っています。

高橋氏：ありがとうございます。それでは中井町長、「世界がみとめた『特別な材料を生み出す能力とそれらをつなぐ人々』のまち」のご紹介がありました。吉野町の地域資源が軸になりますが、地理的な位置を含め、木を軸にした取組み、牡蠣の養殖や Airbnb、教育などのお話など、かなり広がりのあるお話しでしたが、更に補足点などがあればお願いいたします。

中井氏：吉野町での町政運営では「木を軸に関連性を持つ」、ということを軸としています。美しい木を見れば、単に美しいと思うだけですが、「プリツカー賞」という建築界のノーベルショーを受賞されたスペインの RCR という建築家が「吉野杉の家」を訪れて下さいました。日本人では安藤忠雄氏、坂茂氏、伊東豊雄氏が受賞されている賞です。この RCR の方が、「吉野の木の美しさはそこに関わる人々の愛情である、そういったことに美しさを感じる」と話されました。やはりモノを見せるだけで



はなく、ストーリーをしっかりと見せていく、地域で感じていただく、ということが一番大切であると思っています。ここで吉野杉の美しさを見せても、なかなかイメージはわかりません。地域の土地に来ていただき、ストーリーを感じていただく。このようなことを今後の大阪・関西万博までに、またその後にやるべきことかなと思っています。一緒に色々と企業の方々と取組みができればと思っています。

また、フォレスターアカデミーですが、吉野の地では 100 年 200 年と木を切っていかなければなりません。石黒先生のアバターの話はとても面白く、個人の分身になるアバターや、規制により

作業が出来ない夜間に、アバターで狩猟ができればいいかなと思います。獣害は山村地域の大きな課題ですので、そういった未来の課題に取組めればいいと思います。

高橋氏：ありがとうございます。石黒先生いかがでしょうか。

石黒氏：山村地域にアバターで色々なサービスを提供するということもできますし、その逆もあります。吉野町は河瀬氏と密に連携を取られていると思いますので、大阪・関西万博で存分に絡んでいかれるのだと思います。

高橋氏：それでは、阪口市長、「瀬戸内海・大阪湾の海運と自治体のつながり」の取組みについてご紹介をお願い致します。

阪口氏：瀬戸内海や大阪湾の自治体のネットワークによる災害時の応援協定があります。西日本豪雨時には、広島市内からの陸路が土砂崩れで寸断されていたので、堺から呉まで水や支援物資を積み運びました。当時政調会長であった岸田総理には非常に喜んでいただきましたが、海を使うということがあまり有効的に使用されていません。やはり規制緩和というか、規制改革は続けていかなければいけません。今日の船上 MICE のルートも神戸周辺をぐるぐる回遊しています。大阪府の港湾局との話になりますが、大阪湾を周遊できるようにするなど、規制改革、規制緩和を進めていかななくてはなりません。



仮想空間は現実になってきます。ウクライナのゼレンスキー大統領は、リアルタイムで様々なことを SNS を活用して発信しています。また、コロナ禍で学級閉鎖になり、デジタル教科書やオンライン授業が非常に進みました。授業は毎日進めないといけませんが、1 クラスに感染者が 4, 5 人出ると学級閉鎖をしないといけない状況ですので、先生方もオンライン授業をどんどん行うようになりました。石黒先生がおっしゃられたアバター、メタバースを我が身に置き換えて進めていく気持ちで、企業の皆様も何かあればここにいる首長をはじめ、遠慮なくおっしゃってください。他の首長方にも協力していただけたと思いますので、宜しくお願い致します。

高橋氏：ありがとうございます。次に官民共創、市民共創について石黒先生、何かございますか。

石黒氏：メタバースもアバターも規制はまだありません。不思議なことに海外では規制がないことでどんどん自由にビジネスを興していくのですが、日本では規制をつくって下さいと言われてます。これは本当に間違っています。日本では規制がないのでルールをつくってくれないと動けない人が非常に多いです。国の事業でも最初にルールをつくりなさいということが多いのですが、ルールをつくる前にマーケットをつくり、世の中を変えた後にルールをつくるものではないかと思います。空飛ぶ車も新しいことはルールの無い所ですので世の中を変えられるのです。今の



基準でルールをつくり、世の中を変えることをストップしてから、新しいものを創造することはできないと思います。官はルールがない間はもっと自由にやりなさいと、後押しをする。そうでないと民間も元気になれません。民間も怒られるとか、こうして良いのかと不安になるので、まず官が、企業が自由に新しいチャレンジができるように安心させる。そしてみんなが便利だというマーケットができれば、官はマーケットを守るために動く。マーケットを潰すのではなく、マーケットをつくる

ための共創ができればいいと思います。

阪口氏： 泉大津市での、災害時における混雑状況がわかるシステムを高石市でもさせていただいたのですが、これは石黒先生のおっしゃられた、まさに「規制」がないのでできたことです。

南出氏： おっしゃられているのは、避難場所などを可視化するための IT のソリューションのことだと思いますが、可視化することで避難場所がどこにあるかだけでなく、混雑状況もわかるツールです。その他、泉大津市では日本全国で初めてバーチャル市役所をつくりました。これは手続きの簡略化という取り組みです。手続きをするには、何をどうすればよいかわからないという経験がありますが、アンケート形式で問い、チャートを辿るようにすると「あなたはどこの窓口に何を持って・・・」ということが、手続きを行う前に瞬時にわかるものです。皆様の利便性を上げる最適な方法を見つけられるよう、様々なチャレンジを泉大津市では行っています。



高橋氏： ありがとうございます。続きまして伏見市長、ひらかた万博は共創で実現することだと思いますが、共創するパートナーに期待すること、参加する形態や、歴史・文化・食・ライフスタイルというお話もありましたが、期待されるテーマについてご意見はありますでしょうか。

伏見氏： 我々が考えている課題の一つに、農地・里山は限界である、後継者がいない、ということがあります。理由としては、枚方市には田畑で生計を立てている方がいないという事実があります。若い人が(農)作業をしても食べていけないので、将来は荒地になります。この場所を生計が成り立つ場所にしていけないと持続可能性は生ま



れません。民間事業者の皆様のアイデアやノウハウを用い、官の規制を民間の発想で「こうすればビジネスが成立する、こうすれば楽しめる人が沢山増える」、そういう民間の知恵を提供いただき、我々も一緒に取組んでいきたいと思っています。

高橋氏：ありがとうございます。持続可能性は大事なキーワードだと思います。人とビジネスをつなげていくこと、持続可能性はビジネスとつながらないと厳しい面があるとは思いますが、吉野の木を軸に人とビジネスをつなげていく上で何か工夫されていること、官民共創・市民共創などにつきまして、中井町長よりお聞かせいただけますでしょうか。



中井氏：木はサイクルが長い、時間軸が長いです。今までは、企業による商品開発、山間地域の開発、いわゆる川下と川上が同じような地域課題を共有して商品を開発するということまでつながっていなかったと思います。川下で商品を開発する時には、川上まで入り込んで開発できるようにしたいという話があります。いかにそのような場をつくることができるのか。コワーキングスペースなどもありますが、マッチングをどうするのかだと思います。地方は高齢者の居場所や子育て世代

の居場所がありますが、ビジネスをする居場所がほとんどありません。商工会はありますが、林業や観光などです。後継者課題を解決するために、経営者とその周りの方々と出会う場をつくる、その中で新たな産業の再構築、新産業創出が出来ればと思っています。官民共創に関しては、今回の大阪・関西万博を機に、パビリオンや事業を展開していく中で、我々はそういった役割をしっかりとやっていきたいです。

高橋氏：川下・川上についての重要なお話をありがとうございました。最後に阪口市長より大事なご提案がございします。「2025 年日本国際博覧会とともに、地域の未来社会を創造する首長連合」の取組みと 2025 年大阪・関西万博を全国で盛り上げようというご提案いただければと思います。

阪口氏：私は 1970 年の万博を知っている世代です。当時、千里中央まで歩いたのですが、今はどこにもある「動く歩道」に非常に驚きました。携帯電話も非常に大きいものでした。しかし、これらは現実のものになっています。アバターやメタバースは必ず現実になります、カーボンニュートラルもそうです。それらを大阪・関西万博でトライします。皆様、大阪・関西万博に乗っからない手はありません、最大で最高のチャンスです。首長連合は 596 の市町村が加入しており、この 6 月 1 日に総会が開催されます。萩生田 光一経済産業大臣、若宮 健嗣国際博覧会担当大臣、吉村 洋文大阪府知事も来られますが、関西から遠い地域の首長の方の中には、大阪・関西万博は

大阪関西だけのものでしょう、という意見の人もおられます。それは違います、皆で一緒に国際博覧会をしましょうと声をかけています。企業の方も全国の市町村に紹介させていただきますので、是非一緒に取り組みましょう。

全国味自慢、腕自慢・物産展からまず始める。ただの物産展ではなく、企業の方々も参加し、色々な新商品もどんどん出していただきたいです。首长連合も夢洲新産業・都市創造機構と同様、目指す頂上は同じです。明るい未来社会、いのち輝く未来のデザインを築いていきます。是非皆様のお力添えをお願い致します。



高橋氏：本日は、石黒先生、首长の皆様、ご参加の皆様、ありがとうございました。

閉会の辞

野田 氏 東大阪市長



本日は、長時間ありがとうございました。第2回フォーラムは海の上ということで、多岐に渡るビジョンを感じていただければと思いました。石黒先生のお話は度々拝聴しておりますが、アバターの存在の話がありました。今、日本全国の子どもたちは一人一台タブレットを持っています。東大阪市では、タブレットにAIドリル機能を入れています。例えば小学校5年生ですが、AIが小学校3年生の問題からすればよいと判断すると、小学校3年生の問題を出します。私は、人間の先生が教えないとダメで

あると思っていましたが、AIドリルのモデル事業校では子どもの成績がぐんぐん伸びてきました。また、NAOくんという英語ロボットが2台あり、子どもたちは英語を面白がってしています。我々が生身の人間でないとダメだと思っていてもそうではありません。発想を大胆に変えていかないとはいけません。何度も出て来ました官民、公民連携ですが、我々には多くの課題があり、課題は可能性であり、課題解決にはビジネスチャンスがあると思っています。夢洲新産業・都市創造機構が自治体と民とのある種のプラットフォームです。公民連携フォーラムが来週開催されますが、是非皆様と一緒に大阪・関西万博を一つの起点とし、未来をつくっていききたい、公民連携の力を今後の日本の発展に寄与していきたいと思っておりますので、引き続きの御協力をお願い致します。本日は本当にありがとうございました。

船上交流会

フォーラム後には、船上交流会を行い、美しい海の風景を愛でながら、日常とは異なるクルージングで、自由にご交流いただきました。また、夢洲機構会員の村川学園の学生達が泉州地域食材で創作したリージョナルキューイジーヌのお弁当とお土産の泉州カヌレもご好評いただきました。



～～泉州産食材使用 懐石弁当 九杣弁当～～

◆なにわ黒牛ローストビーフ（産地：阪南市）

黒牛に焼き目を付け紫蘇の葉をベースにしたソースで絡め真空し低温加熱調理をしております。

◆穴子八幡煮（産地：岸和田市）

穴子を下処理した後、湯がいた牛蒡で包み干瓢で巻き、かつお出汁で蒸し煮しております。

※鰻の八幡巻きをイメージしたお料理です。



◆水茄子の干し海老と茗荷煮（産地：岸和田市）

刻んだ茗荷と干しエビを入れた合わせ出汁に、揚げた水茄子を漬け込んでおります。

※泉州地域にある【じゃここうこ】をイメージしたお料理です。塩漬けた水茄子とじゃこ海老をお醤油で焚いた泉州地域の郷土料理をイメージしたお料理です。こうこは漬物の事を指します。

◆れんこん海老のはさみ揚げ 抹茶塩

蓮根をスライスして、開いた海老で挟んであげた料理です。

◆鱧ちり 大葉 梅肉

鱧を開き細かく骨切りをして湯通しし冷水に落としてあります。5 月は、鱧と梅が出始める時期なので出会いの食材で組み合わせております。

※骨切り：鱧の骨は 3500 本以上あると言われ骨を取り除く事が難しい為、1 cm に 10 回以上の包丁を入れ口に骨が当たらないようにする技法です。

◆黒鯛昆布締め龍皮巻き（産地：岸和田市）

黒鯛を 3 枚卸にして骨を取り除き、塩をし身を締めたのち酢で洗っています。酢で締めた身を開

きガリを芯にして巻き、さらに龍皮昆布で巻いています。

※塩をする事により余分な臭みを抜き、酢で締めることにより防腐効果も高まります。

◆蛸柔らか煮（産地：岸和田市）

活け蛸を締め、身を叩いた後に切り分け湯通ししております。その後、合わせ出汁に小豆を入れ3時間ほど蒸し煮しております。小豆を入れて焚くことにより、より一層赤く発色します。

◆筍土佐煮

破竹を湯がき切り分け、焚き込んでおります。炊き上がりに粉鯉をまぶしております。

◆信田巻き

豆腐に木耳・人参を入れ、それを芯にして薄揚げで巻き蒸したのち、焚いております。

※和泉市にある信太の森に住む狐が美女に化け、子を授かったと言う伝説がある。狐が油揚げを好む事から油揚げを使用した料理の事を信太というようになった。

◆古代米とシラス山椒煮（古代米 産地：泉大津市／シラス 産地：岸和田市）

古代米は白米と混ぜ同割の水で焚いております。シラスは、サッと湯通した後、酒に醤油、砂糖、山椒をいれた合わせ調味料で焚き込んでいます。

～～泉州カヌレ～～



- ◆いちご（和泉市）
- ◆きくな（岸和田市）
- ◆日本酒（阪南市）
- ◆はちみつ（熊取町）
- ◆抹茶（高石市）
- ◆ブルーベリー（岬町）

以上